

人間の社会的構造と疎外

松浦孝作

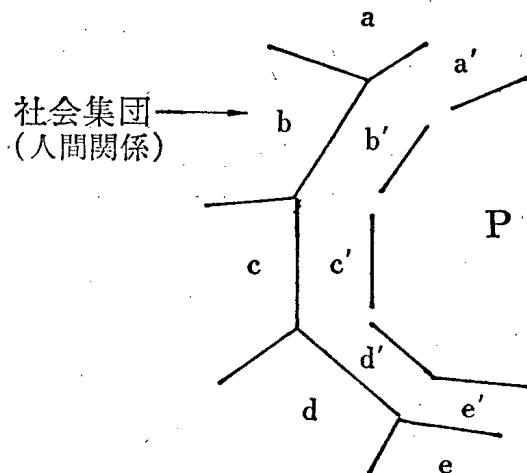
個性や自我の概念はルネッサンス以来きわめて機械的図式的にわりきられ、先天的なものとして一般にも学問上でも考えることが大勢となっている。そこには社会的歴史的諸条件がつよく背景になっていると思われるが、こうした人間観はすでに様々な立場から反省され再検討をせまられている。社会学における社会と個人の問題についてもそうだ。多くはルネッサンス以来の固定観念によって個人を機械的に想定し、その複数として集団を考え社会を説明することが社会学の古典的理論であり一般の常識ともなっている。しかし事實はそう安易にわりきれぬものではないし、そうした古典的理論では社会と個人の問題のみならず多くの複雑な現実は全く解明することができないように思われる。ここでは人間疎外の問題を考えるについて人間とは何か、個性とか自我とは何か、個人と社会との相関はどう考えられるかを一つの試論としてのべてみようと思う。

人間性とペルソナ

社会と個人は機械的に分断された両極と考えるはならない。それはあくまでも盾の両面であり、山と大地、波と水との関係のように本質では一体でありながら、その現象形態を異にするだけである。いわば社会という溶液が様々な結晶して P_1, P_2, P_3, \dots という個人を形成していると考えられる。社会はこれら個々人の総体というよりも、これら個々人を貫く共通因子であり公約数だと考

えた方がわかりやすい。社会は人間の外にあるとともに内にもあり、個人の出生に先だって伝承され個人の死をこえて受けつがれていく。この意味ではじめて人間は社会的存在であるとともに歴史的存在であるといえる。

こうした人間性の社会的構造をするためにその断面図を示すと次のようになろう。人間 P は無数の行動様式 (= 社会習慣) を模倣し学習し条件づけをうけて、生れながらの非社会的存在から次第に社会的存在に形成されていくが、成長の過程で条件づけをうけた行動様式は或いは意識の底に、或いは大部分無意識の裡に沈澱しながら P の内容となる。自我とか個性とかパーソナリティと総括される P の表層は、たえずその時々の人間関係に規定された行動様式に条件づけられて、P の意識とか、態度とか、行動といわれるものを形成する。これをそれぞれの人間関係のちがいに応じて P_a, P_b, P_c, \dots とすれば、それはいわゆる社会的地位に対応した社会的役割をも示すものとみてよい。これから P_a, P_b, P_c, \dots をかりにペルソナと呼ぶことにする。ペルソナは本来、仮面の意味だが、あたかも俳優が役割に応じて一定の衣裳を身につけ、定まった台詞を口にし演技をすることの象徴と考えてもよい。ギリシャ演劇や能の仮面に象徴されるものである。



現在の P の自我とか個性といわれるものは多くはこれら P_a, P_b, P_c, \dots というペルソナによって評価される。ペルソナはおよそ人間関係の異なるに応じて無数にあるともいえるが、やはり家族とか、地域社会とか、職場、学校、交友、その他主要なゲゼルシャフトにかぎって、一般に承認されたその行動様式を指

すことにする。それは後にも説明するように、まさに社会的行動様式であり規範でありモレスであり、法であり徳目であり、社会的期待又は要請であり抽象概念である。Pにおけるa, b, c……はP₁, P₂……におけるa, b, c……と全く同一ではなく、P, P₁, P₂……により互いに個人差を示しながら、一定の限界内で社会的な行動様式を公約数として示すものである。親子の行動様式といい、徳目といい、一定時代一定社会において或いは職業別階層別などで社会的な行動様式を抽象し規定することができるが、さらにミクロに個々の家庭や親と子によって千差万別のちがいの存在が現実である。こうした個人差を認めながらやはり社会的歴史的に一般化する行動様式を公分母として設定することができる。これがペルソナである。社会的なものと個人的なものとの相関は言語活動についてソシュールが示したラングとパロールの分析を考えれば理解しやすいだろう。

人間Pはペルソナを通じて個々の社会集団に帰属し、その社会的地位を確保する。ペルソナは個人Pと社会との接点であり窓口である。一人一人のペルソナの公倍数が集団の連帯であり紐帯となる。ペルソナこそ個人的であるとともに社会的なものである。

Pの評価はしばしばその外面的なペルソナをできるだけつぶさに正しくとらえることにあるのは日常の調査でもよく知られている。しかし悉くこれを正しく捉えることなど至難のわざともいえる。しかもペルソナは外的行動であり、内的行動としての態度であり、さらに一皮めくった意識にとどまり、人間の深層によどむ無意識に立ちいることは不可能である。無意識は人間の大部分を形成するのみでなく、たえずペルソナを規制し抑圧をはね返えそうとしていることはフロイディアンの力説するとおりである。無意識の内容はフロイト説に加えて、成長の一定段階におけるペルソナ、あるいはその断片の集積と考えられないか。20年成長した木の断面に現れた年輪は気象、環境の諸条件とともに、その成長の過程を具に示しながらその樹木の大きさ、材質を示している。20歳のPにみられる個性といい自我というが、Pのペルソナのすべてを捉えるとともに外から窺い知ることのできない無意識も、幼時期における、少年期におけ

るペルソナが年輪のようにP青年の自我を形成していると考えられる。ただ年輪のようにいつまでもはっきり跡をたどれるものではなく、図で示したようにa', b', c'……が断片的に崩れたり消失しかけたりして、いわば過去のペルソナの残骸の集積ともいうのがふさわしいかもしれない。人間は刻々新しい人間関係、環境の諸条件に適応しながらペルソナを形成しつつ、既往のペルソナを意識の深層に埋没させていく。それが成長であり社会化のプロセスであり、個人的存在から社会的存在への発展である。

周知のようにマルクスはフォイエルバッハを批判して、人間の本質を個々人に内在する抽象的なものに求めてはならず、現実には社会的諸関係の総体であるとのべている。事実フォイエルバッハは形而上学的唯物論者と同じく、現実的な本質の批判に立ちいらず宗教的情操を歴史的過程から抽象し固定して、一つの抽象的孤立的人間的個体を前提している。だから人間の本質といっても、多数の個人を自然的に統合する普遍性——一つの「種」として捉えるだけに終わっていると批判している。こうしたルネッサンス以来の牢固とした固定観念を破って、人間を社会関係の総体として規定することは卓見である。その意味はどう理解すべきか必ずしも明らかではないが、人間をペルソナの多面体と解することも一つの解釈とはならないだろうか。

人間に内在する疎外

人間疎外についても様々な論議が行なわれているが、ここでは立ちいることはしない。疎外の現象形態、疎外の克服についても、後で必要なかぎりふれるにとどめよう。人間疎外の最も顕著な特質は人間の非人間化、事物化であり、それはまさに人間の自己矛盾、自己分裂、自己否定に基づくものであることを強調したい。あたかもおしつぶされたボールが自動的にはねかえって自己の形を復元しようとするように、疎外された人間は自己矛盾にあえぎ、自己分裂をのりこえようともがき、自己否定から脱出しようとはがく。犯罪、非行、問題行動などの反社会的行動となり、自殺、精神障害などの非社会的行動となり、麻薬やアルコール、迷信などの現実逃避となる。もちろん疎外感を自覚し、そ

の社会的条件を正しく認識してこれと対決し克服しようとする道は開かれているが、多数のものは疎外感さえもたず、ただ疎外という最大の公害にさらされたまま逸脱行動におし流されているのが現状である。

こうした疎外はどこからくるのか。人間を歪めボールを凹ます力はどこからくるのか。その社会的諸条件についてもここで詳しくふれることはしない。ただゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの転化、資本制社会の矛盾の拡大を思い起していただきたい。テニエスは近代社会を商業社会として規定し、すべての人間は商人として結びつくことを力説した。人間はその個性としての使用価値を抹殺され交換価値だけがとりあげられる。政治的、職業的場における公共的自我と家族や地域共同体における私的自我が分離され、人間関係はただ一面的な場のつながりだけで全体的には互いに無関心に陥る。分離と不和、限りない利己主義が支配し、共同体のない社会、人間的充足の阻まれた社会に転化する。人間は非人間化され疎外される。マルクスも資本制社会に典型的な賃労働について、労働からの疎外、生産物からの疎外、類からの疎外、人間の人間からの疎外、あるいは私的所有における事物からの疎外などを説明しているが、その古典的理論はよくしられている。これらにつながる現代人の市場的構え、他人指向型、人間のアトム化などの諸説もよくとりあげられている。

こうした人間の自己矛盾、自己分裂、自己否定はその社会的構造にどう現れているのか。先に示した図ではどう説明できるのか。人間の統一体としてのPとペルソナとはどう相関し、どう対立するのか。疎外が内在するとはどういう意味なのか。

Pは全人格的統一体であり、自我とか個性とかいわれるもの。人間性の実像であり、いわば使用価値である。人間行動の総体として社会的表象、あるいは象徴と考えられる。ところが P_a , P_b , P_c ……なるペルソナはPの一側面を抽象し分断した客我であり社会的人間であり、いわばPの虚像であり交換価値を示すものといってよい。Pを肉体にたとえればペルソナは魂ともいうべきもの。Pが人間性の現実的形態であるとするれば、ペルソナはその観念的形象である。Pは個性を実現する具体的個別的行動であるとするれば、ペルソナはその社会的

性格を示す抽象的一般的行動であり、一定の個性を実現するものである。つまりペルソナはPを抽象したその一面であるとともに、Pの帰属する一定集団の平均的行動様式でもある。個性Pが一定の社会関係に入ってP_a, P_b……なるペルソナに転化する。つまりペルソナは一定の行動様式として現れた社会的人間関係である。社会的人間関係が人間行動に内包されたものである。即ち個々人の行動相互の関係が同質的で一般的な人間行動として抽象されたものであり、行動の特殊社会的形態が対象として実現されたものにほかならない。人間性はPとして実現されるためにはP_a, P_b……なるペルソナとして実現されねばならぬ。個性とペルソナとは過程的統一として理解すべきものである。

以上から明らかなように、実像Pは数多くのペルソナP_a, P_b……なる虚像に分割される。ゲゼルシャフト化の傾向が顕著になるほど、こうした分断は著しく仮面と実像との対立矛盾は大きくなる。市場的構えとか他人指向型とかアトム化がつよまる。本来 Individual なものが dividual なものに転化する。さらに、個人の行為が同時に社会的行動として現されねばならぬ矛盾が内在する。特殊の具体的行動が同時に抽象的一般的行動としてのみ現されねばならぬ。個人の社会化が同時に社会の個人化とならねばならぬ。またペルソナの定在を示す行動様式の結晶として道徳律や法や多くの価値体系があるが、それは社会的歴史的条件の変動により固定化し形骸化し、具体的現実的な実像Pの生命活動とギャップを生じ、対立矛盾をはらむ。またPの強力な内容を形成する無意識も過去に条件づけられたペルソナの堆積とみなしてよいが、その断片と現実のペルソナとの葛藤もあり、P_a, P_b……の各ペルソナ間の葛藤対立も少なくない。まちがい、し損い、言いそこないなど日常生活における過失や問題行動は多くこうした分析によって究明できるようである。あるいは児童、とくに発達段階の初期にある幼児の言動にはこうした葛藤や矛盾がつねにつきまといっている。すでにのべたように、犯罪や非行などの反社会的行動、自殺や精神障害などの非社会的行動もそのケースをささいに点検するとき、つまり多くはこうした対立矛盾による人間疎外と断ずることができる。Pが全人格的統一体として自己を実現し自己を回復しようともがきながら、逸脱行為にはみだしていくの

が大多数である。現代社会は大人といわず子どもといわず、貧者も富裕者もすべて人間疎外の渦の中にまきこまれており、自己矛盾、自己否定に悩まされている。資本制社会の必然性は強力に疎外を推進するからである。

疎外の克服について一言つけ加えておこう。社会のゲゼルシャフト化への大勢は阻むわけにはいかない。それが資本制社会の矛盾とからみあうところに基本的な問題がある。人々が疎外に蝕まれながらその真相を知らず疎外感をもたぬ昏睡状態から脱出することが第一の要件であろう。アン・ジッヒの段階からフール・ジッヒに発展し、疎外を自覚するにいたれば、いかにこれを克服するか、その方向は正しく見通すことができよう。いわゆるアン・ウント・フール・ジッヒの段階をめざして進まねばならない。ところが教育も政治もむしろ意図的にアン・ジッヒの段階におしこめていることが最大の障碍である。歪んだボールはとんでもない方向にはねかえったり、おしつぶされたままに萎縮する。いかにして疎外を自覚し、これを克服するかは歴史の新しい展望をもつことにほかならない。